

単身高齢者の地域資源ネットワークを活用した居場所形成について

—釜ヶ崎における単身高齢者の地域居住および地域資源ネットワークに関する研究 (1)—

正会員 ○岩川 晋也*
同上 林 一樹**
同上 横山 俊祐***
同上 徳尾野 徹****

釜ヶ崎 単身高齢者 ネットワーク
地域資源 居場所 地域施設

1. 目的と背景 本研究は、住宅困窮者や劣悪な居住環境居住者が生活空間となるコレクティブタウンの可能性について検討することを目的とする。本稿では、地域資源を利用することで三帖一間といった住まいの狭小性を補いながら地域で幅広い生活を展開することの特性と意味について考察する、転用型アパートなどの居住資源と地域に点在する地域資源をつなぐことができれば、単身高齢者の更なる地域居住の促進ができると考えられる。本稿では世間一般に問題とされている高齢者の独居生活に対して、釜ヶ崎で幅広い生活を展開する単身高齢者の生活実態を調査することで、単身高齢者の地域居住を促進する地域資源ネットワークあり方を模索する。

2. 研究概要 釜ヶ崎における主な支援団体に対して、施設運営に関するヒアリングや立地特性・空間特性を把握し、現地調査による地域資源の現状分析を行った。(図1) また、単身高齢者の生活実態を把握するために、アパート共用部や地域施設の利用者12名に対して観察調査およびインタビューを行った(表1)。

3. 居場所の分類と位置づけ

施設(NPO、民間施設) 居場所の提供や、無料でイベントなどボランティアな取り組みをしている。施設を通じた社会参加によって、社会的な願望を満たすタイプが多いが、しかたなく利用する人も存在する。規律や時間的な制約が存在し、規制に敏感な反応をする人からは敬遠されやすい居場所になっている。また特掃のような掃除の仕事に加え、市民館でのカラオケの参加や、施設の鍵を開けるのが日課になっている利用も見られ、定期的に

イベントによって規則的な生活を送ることができている。
アパート内の共用空間(一体・併設型)(図2): 共用空間が外部空間と面しており、内包型よりも利用者は不特定多数になり、地域住民が利用しやすくなっている。このタイプの多くは施設の間となっており、内包型のような偶発的な交流ではなく、利用者が交流を目的に集まり、情報交換やつながりを生む場所として機能している。一体・併設型のアパートの住民は、日中は毎日共用部分で過ごしているといったように、積極的な利用が見られるが、居住者の利用においては、アパート外への活動が制限されるため、地域の拠点を作りにくい傾向が見られた。
アパート内の共用空間(内包型)(図2): 内包型の共用空間はほぼ居住者の利用に限られおり、買い物から帰宅時に、知人がいることで生まれる会話や、洗濯物等の生活の待ち時間で交流が生まれている。喫茶スペースを通して友人が生まれるなど、活用法によっては交流を生み出す資源になると考えられる。また談話室を積極的に利用してないという意見が見られ、内包型の共用部では積極的な活動は行われていない。

表2 居場所の実態

施設[1]	併設+一体型[2]	内包型[3]	飲食店[4]	公共のたまり場[5]
習慣的にコルუმのイベントやこころざみどり苑のふれあい喫茶やバザーなどにも顔を出し、曜日ごとに異なる生活をしている[rk]	むすびを中心に活動が様々な地域施設へと展開しているが、紙芝居の公演を介してのつながりであり個人的な利用-つながりにはあまり発展していない[sn,hn,nk]	喫茶スペースでは洗濯物が乾くまでの待ち時間にコーヒーを飲みながら管理人や友人を電話で呼び出したり、[ys]	昼間から行きつけのママに会うために飲みに行くことがある。[mr]	カラオケに行くついでに市民館で知り合った友人の職場に顔を出したり、三角公園のベンチに座ってタバコを吸いながら一服をする。
アパートや支援スタッフとの会話がほとんど[ok]	ほぼ毎日、日中をむすびで費やしている[nk]	喫茶スペースができてから仲良くなり、今では部屋を歩き来すの仲になった[ms]	行きつけの喫茶店に毎朝通うが、そこでのマスターとの会話がほとんど。[ok]	辛いことがあった時には、仲間に相談しに行く
火・日・水・木にはカラオケに行くのが習慣になっている。[km]	こころざではコーヒーを飲みながら読書をして過ごす[rk]	喫茶スペースを一人で利用することは少なく、友人と利用するケースが多い。[ms]	自分の部屋で食べるか、むすびで食べる。また商店街の惣菜屋に食べに行く。[nk]	コルუმなどの施設を利用する際には三角公園を必ず通り、仲間に挨拶をする。
むすびの鍵の管理を任せ、毎朝10時にはむすびを開けに行く[mt]	日中の多くをむすびで過ごし、昼食もむすびで食べる[rk]	談話室での積極的な利用は行っていない[km]	朝は喫茶店でモーニングを食べる[tk]	行動範囲は基本的にアパートと仕事場の住後、仕事前や仕事後に散歩がたり、商店街を少しあるいている。
			交流	生活

表1 調査対象者の概要

仮名	年齢	性別	所得	世帯	住居形態
nb	60	男	生活保護	単身+子供	アパート
rk	60	男	生活保護	単身	アパート
an		男	生活保護	単身	アパート
ok		男	生活保護	単身	アパート
ys	67	男	生活保護	単身	アパート(※)
ms	65	男	年金	単身	アパート(※)
tk		男	生保+年金	単身	アパート(※)
mt	61	男	生保+年金	単身	SH
hn	82	男	生活保護	単身	SH
nk	81	男	生活保護	単身	SH
sn	92	男	生活保護	単身	SH
km	62	男	生活保護	単身	SH
msr	85	男	年金	単身	BH

※サポーティブハウスではないが共用スペースがある

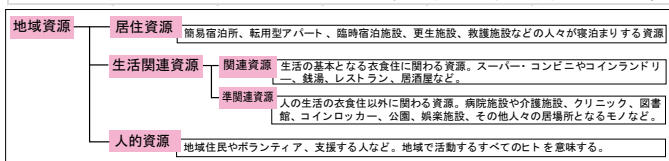


図1 地域資源の定義

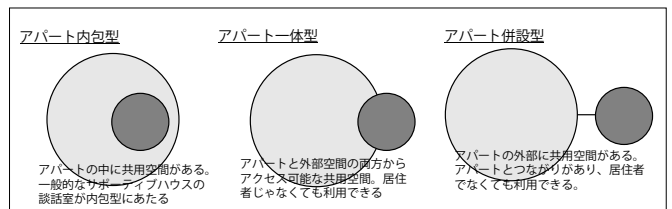


図2 アパートの共有空間のタイプ

The Study on the Characteristics of Independent Single Elderly's Place to Stay with Network of Local Resources

IWAKAWA Shinya, HAYASHI Kazuki
YOKOYAMA Syunsuke, TOKUONO Tetsu

飲食店 食事目的ではなく人づきあいを目的とし、利用にはお金が必要になるが、それ以上に居酒屋のママや喫茶店のマスターとの関係を大切にしている。行きつけの飲食店をもつことがステータスにつながると考えている人もある。アパートの友達やその他の知人を連れていく場所でもあり、“人間関係を深める場”であると言える。施設のように時間的な制約や規律が存在せず、お金を払ってでも“会話を楽しむ場”として機能している。毎朝モーニングに行きつけの店に食べに行き、マスターと会話を楽しむといったような、生活の一部として喫茶店へ足を運ぶ高齢者も見られる。

公共のたまり場 三角公園や労働福祉センターの1階のように地域内に多くのたまり場となる空間が存在し、このたまり場を通して野宿生活や日雇労働者時代に築いた繋がりを継続させている人が多い。野宿生活時代の友達に会いに行ったり、単身高齢の独り暮らしからの寂しさをまぎらわすためや、辛いことがあった時に仲間と相談できる場となっている。ゆるいつながりが有効に作用する場所であるが、あまりつながりを持っていない人や、施設のような秩序のある空間を好む人にとっては安心できず、利用しにくい場でもある。飲食店のように金銭的な縛りはなく、また飲食店同様に時間的な制約や規律は存在しない自由な交流を生み出す場となっている。三角公園へは、散歩のついでに立ち寄るような、不規則的な形で足を運ぶことが多い。

4. 高齢者の生活特性 (図3)

複数拠点ネットワーク型 滞在時間と利用頻度がバランスよく分布している。アパート以外に生活の拠点を持ち、そこでの人間関係を中心とした、人間関係を構築している。仕事やイベントを中心とした生活リズムをもち、地域のイベントや講演会、ふれあい喫茶、バザーなどに参加する。自主的にボランティア活動に取り組んだり、表現の場を好む人が多いのが特徴である。

事例 mr 月 5, 6 回特掃で働くことが生活リズムを決める要因となっている。特掃では顔なじみからコーヒーや日用品の差し入れをもらう。仕事帰りに一緒に飲みに行くなど特掃を介した人付き合いを展開している。居室を拠

点としながら散歩がてら三角公園や、ふるさとの家、労働福祉センターに顔を出して、仲間と会話をする。昼間から行きつけの居酒屋のママに会いに行くこともある。

少数拠点型 滞在時間と利用頻度に偏りがあり、居室以外に一つか二つ程度の拠点を持つ。少数の生活拠点の他には、スーパーやコインランドリーなどの生活に欠かせない施設の利用だけにとどまっている。施設、アパートスタッフを中心とした深く狭い人間関係を構築している。

事例 ys 数年前までパートの仕事をしていて、65歳で退職し、現在は生活保護を受給している。週に1回クリニックに通い、定期的に大学病院で検診も受けている。週に2回ヘルパーが食事を作りに来る。食材などの買い出しは自分で行っている。体操教室に参加するなど、普段から管理人と親密な関係を取っており、アパートの花の手入れも毎日欠かさず行っている。

資源通過型 (散歩型) 各拠点の滞在時間は少なく、利用頻度が多い。あまり深い交流は見られず、あいさつ程度の薄く広い人間関係を構築している。

事例 an 知り合いがいつもセンターの近くにいるため、毎日センターに通うことを日課にしている。多い日は何度もセンターと居室を往復する。センターに椅子を払って会話や、通りすがりの友人に挨拶をする。昼食もセンターの付近で一人もしくは友人と一緒に食べる。またセンターのシャワーを頻繁に利用している。コッルームなどに日常的に顔を出す、顔を出すといった程度で、積極的な交流は見られない。

5. まとめ

単身高齢者の増加が考えられる日本社会において、釜ヶ崎を持つ地域資源ネットワークによる単身高齢者の居場所や生活の形成は、高齢者同士がお互いを見守る・助け合う・寄り添うといった福祉の目標とする形を実現していると考えられる。全ての機能を内包している住宅に比べ、釜ヶ崎の三帖一間の転用アパートは生活する上で最低限の機能しか果たしてない。しかし単身高齢者は不足分の機能を地域の中に見出し、施設や他の単身高齢者の助けを借りながら多様性のある人間関係や、自らに適した生活を作り上げることに成功している。

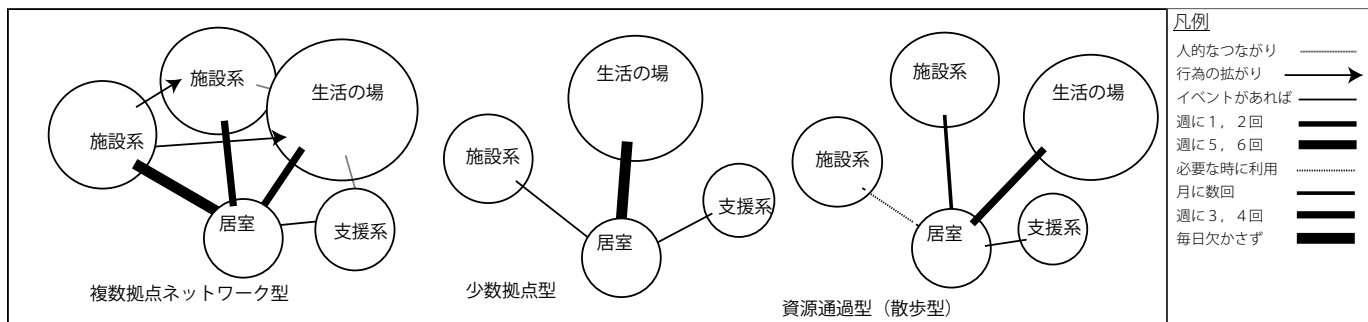


図3 生活特性別地域資源関連ダイアグラム

*大阪市立大学工学研究科後期博士課程
 **大阪市立大学工学研究科前期博士課程
 ***大阪市立大学工学研究科 教授・工博
 ****大阪市立大学工学研究科 講師・工博

* Doctor Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 ** Master Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 *** Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng.
 **** Lect., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng.